平成29年（2017）
阿づまの光
2月号・Februaro

教主さまお作　鉄絵梅紋茶盌

【みろく土】

題字出口直日

通巻第575号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

天地の正しき道を踏みしめて
歓ぎむつまひ御代に仕へむ

出口王仁三郎聖師

一期一会

祭務課　神宮　幸太郎

ご神命により、東京本部祭務課勤務のお許しがあり、間もなく1年になる。その間、関東教区の方々には、公私にわたり、日々お世話になっています。仕事上、祭務関係でのお付き合いが多いのだが、昨年は、千葉主会主催『親子の集い』、神奈川主会夏期学級、また10月16日に盛大に行われた、走水神社記念祭典など、お手伝いさせて頂く機会にも恵まれた。

これらの祭典行事、いつも悩まされるのが〝雨〟。幸いご守護をいただき、この一年はいずれも天気良好であったことは、本当にありがたい。

今まで数多く、種々の外での祭典にお仕えさせていただいた小生は、降雨（雪）時に、いかに滞りなく、無事に祭典を終えるための準備をするか等、当時は、同僚の若手職員等と切磋琢磨しながら、準備を重ね臨んだ記憶がある。

自分には、ある雨の祭典で大失敗したことが、今でも脳裏に焼き付いている。いつも、反省ばかりだが、特にその祭典の出来事は忘れられない。なぜ失敗したのか？　準備が足りなかったのか？　あるいは、お仕えするに至らなかったのか？　色々と自問自答しながら、いつまでも寝られなかった事を、10数年経った今でも鮮明に覚えている。

東光苑における数々の祭典、出向祭典などにお仕えするたび、いろいろな方々のご協力のもと、成り立っていることを、改めて強く感じている。また、お道の先輩方々の貴重なお話や助言、後輩である青年達からの、思いもよらぬ的確なアドバイスをもらう事もありがたく、全てが、その瞬間瞬間が、まさしく『一期一会』であると、実感している。

よく『一期一会』や『初心不可忘』など、日常、当たり前のように使ってしまうが、果たして、どこまでその意味を理解し、実践出来ているだろうか。まだまだ、勉強の日々だが、少しずつ恩返し出来るよう、努めていきたいと思いつつ……。

oomoto 開座公講

大本の教風

～根源美の探求～

メディア愛善宣教課主事　出口 飛鳥

美とのであい

私が大本本部に奉職する前の話です。美術大学で彫刻を学び、その後もしばらく彫刻を造っていました。

学生当時、ある展覧会で衝撃を受けました。ピカソです。見た瞬間、ピカソの描いた女性がとても美しく感じたのです。それまで美しいという感覚で見たことがなかったピカソが、ダイレクトに私の心に美という矢が刺さった感じでした。

大学卒業後、私は幼児や小学生の造形活動の講師を始めました。そこで、2つ目の衝撃に出合いました。3歳児の絵の具をぬりたくった画用紙を見て驚いたのです。

特に低年齢の幼児にとって絵の具や粘土、紙といった材料は、創造するための物ではなく、それを使って遊ぶ物というくくりです。材料を使って五感で行為を楽しんでいるのです。

しかしそこに残された色の混ざり、厚み、力強さ、スピード感、発色などから、画用紙の中でいかに楽しんだか、生きたか、大げさに言えば、生命の躍動が伝わってくるのでした。

ピカソの絵も幼児の造形活動も同じで、美の本質がそこにあると感じたのです。

親の芸術に励む

さて本題に入ります。美術史の中で芸術と宗教の関係は、宗教から芸術が生み出されると考えられてきました。しかし出口王仁三郎聖師は、その反対、「芸術は宗教の母」と唱えました。

昭和2年、芸術活動を推進するため、「今までは、子供の宗教活動に力を入れてきたが、これからは親の芸術に励む」と、明光社を設立し、信徒らの先頭に立って芸術活動に勤しみました。

それ以前はというと、大正5年の神島開き以降、聖師の立場が前面に押し出されると、『大本神諭』や『霊界物語』の発表、み手代やエスペラントの採用、人類愛善会創立、世界宗教連合会発会など、宗教活動に大車輪の活動がなされていました。しかし、昭和に入り「これからは親たる芸術に励む…」と短歌、冠句、書画、果ては音頭も取ったのです。といっても、宗教活動も相変わらずで、寝る間を割いて普通の人の何倍もの時間を生きたといえます。

耀盌への道

陶芸の始まりは大正14年。京都の百貨店で体験した即席楽焼コーナーの絵付けでした。普通なら、1個か2個で終わり持ち帰るのでしょうが、始めたら止まりません。これがきっかけで天恩郷に楽焼窯を取り寄せます。ここでは絵付けが中心でしたが、相当な数を造りました。これを、前期楽焼時代と呼んでいます。

しかし、昭和10年の第二次大本事件で聖師は無実のまま留置場へ、両聖地は壊されて跡形も無くなりました。6年8カ月後の昭和17年に出所して亀岡に戻った聖師は、精魂込めた焼き物も壊されたことを知りがっくりしました。しかし、こう言いました。「もういっぺん造る」と。

実は、聖師は刑務所の中で、茶盌を造っていました。ただし、土も絵の具もありません。想念の中で、何度も造っては壊し造っては壊し、色をつけて楽しんでいたのです。

昭和19年の年末から、松楽窯という楽焼工房に通い始めました。それから1年3カ月間、制作が続きました。後に耀盌と呼ばれる茶盌です。約3600個と言われますが、素人がそれだけの数を造るのは、相当な体力と気力が必要です。おまけに、73歳という年齢です。

耀盌といえば、鮮やかな色が特徴ですが、形あっての耀盌です。プロの陶芸家も、「形、口周り、高台、どれをとってもすごい」と言います。

そして、耀盌の表面にある小さな穴。これは、ササラのようなもので、「惟神（かんながら）たまちはえませ」と言霊を込めて穿（つ）かれました。高台周りには、三本の線と放射状の線があります。これはフォークでつけられました。この小さな穴と刻線が、耀盌の形と色をより効果的に見せています。

そして、絵付け。迷うことなく色をつけたといいます。聖師の目には、出来上がった色が見えていたのではないでしょうか。絵の具が混ざり濁っているような色もありますが、色として輝いています。幼児の画用紙に見た生命力に共通すると思います。

聖師は出来た茶盌を、家族や信者に「これは宝玉や。今に宝になる」と言ってあげました。戦中、戦後の当時、色で言えば灰色の時代です。そんな時に、鮮やかな色の茶盌を手にした人たちは、明るい未来を感じたに違いありません。

耀盌顕現に至る3つの眼

昭和23年1月に聖師は亡くなりました。その秋、備前焼の陶芸家・金重陶陽（かねしげとうよう）と弟の素山（そざん）が、兵庫県の竹田に住む、聖師の長女・直日、後の三代教主を訪ねます。陶陽は後年に人間国宝に認定された、備前焼中興の祖と呼ばれる人です。三代教主は、2人に聖師の茶盌を見せました。

〝侘寂の茶陶の中で、この茶盌はとても奇抜だが、そういう概念をはずしたら、とてもきれいで美しいと感じる。しかし、自信がない。そこで、プロに見てもらおう〟ということです。

三代教主は、50個ほどの茶盌を並べ、「どれでも好きなものを選んでください。差し上げます」と持ちかけました。二人

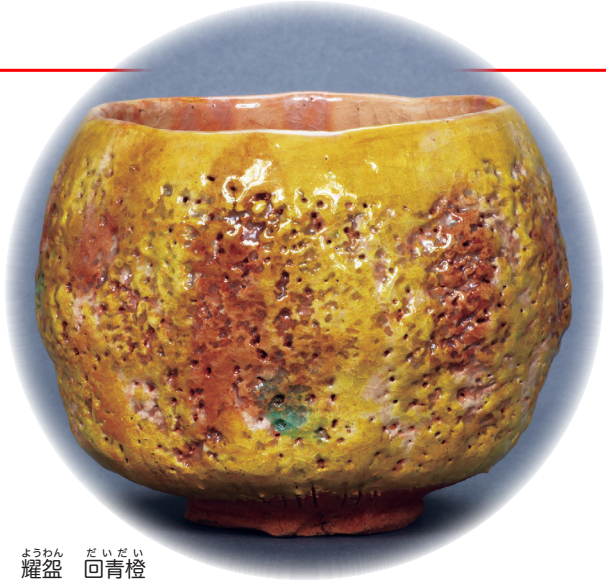
は長い時間をかけ、陶陽は「天国廿八」、素山は「御遊」という作品を選びました。最後に感想を求められ陶陽が言ったのが、「古今独歩」という言葉です。これは、「過去から現在にいたるまで、並ぶ物がない」という意味で、大絶賛の言葉でした。

翌年の2月、陶芸評論家の加藤義一郎が金重陶陽宅を訪ねました。加藤はその日の日記に次のように記しました。「王仁師手造り「天国廿八」「御遊」の二盌を見せられておどろく。その色彩とリッチさ、茶盌の姿、芸と人格、天才」

1カ月後、加藤は「日本美術工芸」誌に、「耀盌顕現」というタイトルの文を掲載しました。

「私はこれこそ明日の茶盌だと言った。もしこんな茶盌が日本の陶工によって追随することが出来るとしたら茶道は楽々と世界の舞台に上がるに違いない」

この時初めて聖師の楽茶盌が「耀盌」と呼ばれました。加藤が、星の耀きにたとえたのです。



耀盌　回青橙

耀盌が紹介されると、陶芸界や美術界、茶道界は大きな衝撃が走り、大阪や東京国立博物館で鑑賞会が行われました。「素晴らしい」という人も多くあれば、「あれは、茶盌ではない」という人もありました。侘寂という美的感覚とは正反対の茶盌に、手放しで拍手を送ることができなかった人がいたのも事実です。

聖師がその最晩年に、魂の限りを込めて作った宝玉、楽茶盌。それは、三代教主の美しいものを美しいと感じる心の眼。陶陽と素山の鍛え抜かれた陶芸家の眼。加藤の数多くの美術に触れてきた眼。この3つの審美眼によって世に出ていきました。

天衣無縫の書

さて、この耀盌鑑賞会で大きな副産物がうまれました。稲垣黄鶴という著名な女流書家が、書道界を代表して耀盌を品定めに訪れた時です。稲垣は箱書きの銘「てんごく」の4文字を見て「誰が書いたのか」と尋ねました。

それは、二代教主・すみこが書いたものでした。稲垣は、耀盌にも感激しましたが、それ以上にすみこの字に見入ってしまったのです。「霊筆」という言葉で感動を表現しました。たった4文字を見て驚くというのも、すごいことですね。その後、綾部を訪れた哲学者の谷川徹三氏も「良寛に匹敵する」と、二代教主の書に感服しました。

二代教主は「よがかわりてんかむるいのへたなじおかく」という書をしたため、自身の戸惑いを表しています。そしてこの書が、次の大物の心を動かしました。北大路魯山人です。

昭和24年の晩秋、魯山人が金重家に来て作陶しました。その時、横柄な態度をとる魯山人に腹を立てた陶陽は、魯山人に二代教主の書を見せることを思い付きました。

部屋の床に「よがかわり…」の軸を掛けたところ、一目見るなり、魯山人は後ずさりし、しばらく見入ったといいます。「まさに天衣無縫。ああいう天才は三千年の歴史に見当たらない」とまで言いました。魯山人は自作の焼き物を二代教主に贈り、二代教主から届いた礼状を額に入れて自宅の居間に掛け、来客に自慢したといいます。

芸術が心が照らす

耀盌顕現のころ、専門家たちに大きな衝撃を与えた耀盌ですが、70年を経てその光を感じる人が大勢出てきました。現在、各地で開催されている「出口王仁三郎とその一門の作品展」の鑑賞者の反応が驚くほどです。

ある母娘は、天国廿八という耀盌を見た瞬間、知人の大本信徒から聞かされていた天国の様子が、目の前に広がったそうです。ご主人を突然の交通事故で亡くされ、悲しい日々を送っていたのが、「空気が澄み、緑あふれ、花が咲き乱れているような、これが夫のいる天国だ」と感じたといいます。そう思えたとき、心の不安が消えたと。どうでしょうか。「芸術は宗教の母」というこの言葉は、この体験談、そのものではないでしょうか。

その他にも、いろいろな会場で、作品展の感想が寄せられています。宇宙や生命力、生きる喜びや癒やし、単刀直入に神を感じたという人もいます。芸術が人の心に宗教的な心を生み出しているのです。

神さまの心に近づく

聖師は、「芸術は宗教の母」の教えを、鑑賞するだけの意味で残したのではありません。芸術や伝統文化の実践を通して神の心に近づくようにと説いたのです。三代教主も、自身が様々な芸術や伝統文化に精進すると同時に、信徒にも茶道、短歌、能楽などの伝統文化を勧めました。

これは大事なことだと思います。それは、最初に話したピカソや幼児の造形にも通じるところですが、創造や文化活動は、それを通してものの本質を見つめることであり、行為に没頭し精進することで子供のような素直な心、お筆先に何度も出てくる「生まれ赤子の心」になることで、神さまの心に近づくことなのではないかと思います。

大本には教風として、「信仰即芸術即生活」というものがあります。信仰や芸術は、何か特別なことなのではなく、それは人の生の営みの中にあるということです。創造や文化活動、さらには芸術を通して、一歩でも二歩でも、神さまの心に近づくことができればと思います。

掲載文は、平成28年9月21日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

東光苑新年祭

平成29年丁酉（ひのとり）東光苑新年祭は、元旦の午前7時から、斎主・猪子恒東京宣教センター次長のもと執行され、95人が参拝した。

祭典後、教主さまのお写真に年賀のごあいさつを参拝者全員で申し上げた後、音声による教主さまの新年ごあいさつを拝聴。引き続き参拝者へ、猪子次長が浅田秋彦大本本部長の新年あいさつを代読した。

ご神前では年賀交換としてお神酒が、食堂では直会として神代餅（かみよもち）がそれぞれ接待され、ギャラリーおほもと（東光苑）へも大勢が立ち寄り、新春のご神徳に浴した。

東光苑七草粥

東光苑七草粥は1月7日、午前10時30分から午後3時まで行われ、177人が入席した。

当日は関東教区直心会ご奉仕のもと、七草粥をはじめ、おすましや柚味噌など、真心のこもった席が設けられ、和装姿の直心会員らが入席者を温かくもてなした。

また本席のほかに、歴代教主・教主補さまのお作品展示、茶室・東光庵では高野社中による薄茶の接待が行われた。

東光苑月次祭・成人式式典

東光苑月次祭・成人式式典は1月8日午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、333人が参拝した。

祭員は神奈川主会、伶人は二絃の会関東支部、いづのめしんゆ拝読は森谷しげ子神奈川主会次長、少年祭員は千葉主会の武山なおひさん、武山あおいさん、武山ちひろさん、添釜は高野社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦本部長があいさつに立ち、新成人へ「大本信徒としての自覚と誇りを持って励んでいただきたい」と祝辞を述べた。

中里洋大本青年部副部長あいさつの後、成人式式典にうつり、新成人の上田春彦さん（茨城主会）、貴堂文奎さん（東京主会）、榎戸明日香さん（東京主会）を紹介。続いて遠藤三智子直心会関東教区連合会役員から祝辞、記念品が授与され、貴堂文奎さんが答辞を述べた。その後、新成人は添釜に入席し、関東教区青年部主催による「成人祝賀会」に出席した。

21世紀・生きがい講座

第167回「21世紀・生きがい講座」は、1月18日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、猪子恒東京宣教センター次長が「出口なおの預言」～世界の大峠と立替え立直し～と題して講話した。参加者は27人（内、一般6人）。

講師は、「開祖の筆先は、終始一貫して人類の平和のための啓示が成されている」として、「初めはクセのある丹波弁の平仮名書きにより、読み下しも難解であったが、出口王仁三郎聖師が漢字を当てたことにより、大本神諭として世に広まることとなった」と語った。

参加者からは「大本の成り立ちがよくわかりました」（男性・一般）等の声が寄せられた。

東光苑春季祭式講習会

～3日間の日程に変更、認定試験が受けられます～

日　程　3月24日（金）午前9時30分（9時受付）～26日（日）午後5時ごろ閉講予定

会　場　東京宣教センター

内　容　◯初級クラス　基本動作から月次祭まで
◯中級クラス　基本動作・月次祭・大神鎮座祭・庭上祭など

定　員　40人（宿泊定員40人）

参加費　1人1,000円　**※食事・宿泊代は別途徴収いたします**

持ち物　笏、大本祭式の本、帯または紐（懐笏時に必要）、祭式講習会資料、筆記用具、動きやすい服装、足袋（あれば履く方が動作が容易）、宿泊用品　**※笏は稽古用を貸与可能**

申込み　取得認定級、受講クラス、食事・宿泊を明記の上、**3月17日（金）まで**に、祭務課「東光苑春季祭式講習会」宛へお申込み下さい

成人おめでとうございます!!

東光苑祭典・行事予定

2月

3日（金）午後6時30分執行
開教125年　節分大祭遥拝祭
二代教主・四代教主聖誕祭

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例大祭

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　出口王仁三郎が示した世界
～霊界物語と九州筑紫島～
講師　椎野恭三（祭務課主幹）

25日（土）、26日（日）
教本1級～3級認定講習会

3月

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・交通安全祈願祭・
関東教区春季合同慰霊祭

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題　出口直日、
日出麿からみたみろくの世
～立直しの提言～
講師　猪子　恒（東京宣教センター次長）

24日（金）～26日（日）
東光苑春季祭式講習会講習会

31日（金）午前10時30分執行
二教主手毎年祭（65年）

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com